

# 琉球大学学術リポジトリ

私立幼稚園における家庭教育支援の公共的な意義と  
課題：札幌トモエ幼稚園を事例として

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学地域連携推進機構生涯学習推進部門 公開日: 2020-06-22 キーワード (Ja): 家庭教育支援, 就学前教育, 幼稚園, 私立学校, 公共性 キーワード (En): 作成者: 宮口, 誠矢 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/46228">http://hdl.handle.net/20.500.12000/46228</a>

# 私立幼稚園における家庭教育支援の公共的な意義と課題

## —札幌トモエ幼稚園を事例として—

### Examining Private Schools' Activities for Supporting Education in the Family: A Case of Tomoe Kindergarten

宮口誠矢（東京大学大学院教育学研究科院生／日本学術振興会特別研究員DC）

キーワード：家庭教育支援／就学前教育／幼稚園／私立学校／公共性

#### I. はじめに

2005年1月の中央教育審議会答申「子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育の在り方について—子どもの最善の利益のために幼児教育を考える—」や、2012年3月に家庭教育支援の推進に関する検討委員会から出された報告書『つながりが創る豊かな家庭教育～親子が元気になる家庭教育支援を目指して～』等においては、家庭環境や地域社会の変化により家庭教育が困難なものになっているとされ、親のための相談体制の整備や親同士のネットワークづくりの重要性が強調されている。そして、そのような役割を幼稚園及び保育所が積極的に担うことが期待されている。

しかし、こうした家庭教育支援は、支援の主体としての「公＝行政」と支援の客体としての「私＝家庭」という図式では必ずしも捉えられない。それぞれ全体の6割超を占めている<sup>1</sup>私立の幼稚園及び保育所については、それらが純粋な公的主体とも私的主体とも言い難いことから、公私の関係性は一層不明確である。そのような私立幼稚園又は保育所が主体となる家庭教育支援は、いかなる意義と課題を有しているのか。

本稿では、答申等が出された課題意識や必要な対策の方向性を一定程度共有しつつも独自性の高い実践がなされている札幌トモエ幼稚園を事例として、私立幼稚園における家庭教育支援の内容、意義及び課題を明らかにする。その際、特に公共性の観点から検討を行うことで、園内の子どもや親に対して有する意義や課題のみならず、社会との関わりにおいて私立幼稚園による家庭教育支援がいかなる意義及び課題を有するのかを明らかにする。以下、第II章で幼稚園における家庭教育支援に関する近年の状況を概観し、第III章で札幌トモエ幼稚園における家庭教育支援の概要を明らかにする。第IV章ではその実践の公共的な意義と課題について、齋藤純一によって示された公共性の3つの分類（国家性、公益性、開放性）に依拠しつつ検討する。

## Ⅱ. 幼稚園における家庭教育支援

先述の通り、国の審議会・委員会等においては幼稚園における家庭教育支援が重要との認識が示されている。また、2007年の学校教育法改正で新設された第24条では、次のように幼稚園の担うべき役割を規定している。すなわち、「幼稚園においては、第二十二条に規定する目的を実現するための教育を行うほか、幼児期の教育に関する各般の問題につき、保護者及び地域住民その他の関係者からの相談に応じ、必要な情報の提供及び助言を行うなど、家庭及び地域における幼児期の教育の支援に努めるものとする」という努力義務を定めている。幼稚園における家庭教育支援は、国の審議会・委員会等でその重要性について述べられているだけでなく、法律上でもその実施に努めるよう求められている。

文部科学省の事業としては、1995年度から「未就園児の親子登園、子育てサークルの支援、子育てに関する相談や情報提供等を実施している私立幼稚園」に対する助成を行う都道府県への補助が行われてきた。また、同省は2009年に「幼稚園における子育て支援活動及び預かり保育の事例集」を公表し、幼稚園における子育て支援の基本的な考え方や留意事項とともに、事例紹介として幼稚園での支援活動の概要、関係機関との連携、成果、課題などをまとめている。

幼稚園における家庭教育支援に関連した取り組みの実施状況は、文部科学省の幼児教育実態調査によって明らかにされている。2015年度の実績について調査した2016年度の調査によれば、預かり保育を除く子育て支援活動を行っている幼稚園は公立・私立合わせて全体の94.7%であり、教職員による子育て相談を行っている園は公立で73.9%、私立で59.3%あり、子育て情報の提供を行っている園は公立67.4%/27.7%、私立44.9%/29.2%（紙媒体/インターネット）である。園庭・園舎の開放は公立79.2%、私立71.6%、保護者の保育参加は公立79.7%、私立58.9%、子育て井戸端会議を実施している園は、公立35.2%、私立26.8%である。これらの取り組みの年間平均実施日数は、園庭・園舎の開放が最も多く公立123.1日、私立58.0日である。次いで教職員による子育て相談が公立61.8日、私立57.5日、インターネットでの子育て情報の提供が公立49.2日、私立54.3日、子育て井戸端会議が公立48.0日、私立44.5日と比較的多い。ここで挙げた取り組みの中では、保護者の保育参加が公立9.4日、私立11.0日と最も少ない（文部科学省n.d.）。

札幌トモエ幼稚園が行っている家庭教育支援活動の内容は第Ⅲ章で明らかにするが、以上の調査結果を参照すると、同園の活動の中でも子育て相談や園庭・園舎の開放は比較的良好に見られる取り組みである。しかし、保護者が毎日保育参加を行える環境が用意されている点は札幌トモエ幼稚園の特徴と言える。日常的に共同体のつながりを活かした子育て支援を行っている点も、同園に特徴的な支援活動である。

## Ⅲ. 札幌トモエ幼稚園における家庭教育支援

### 1. 札幌トモエ幼稚園の概要

札幌トモエ幼稚園（以下、トモエ）は、北海道札幌市南区に所在し、札幌駅から車で30、40分ほどのところにある。園舎は森に囲まれ、近くには沢があり、日常的に自然体験ができる環境にある。トモエは親が子どもとともに通園できる幼稚園であり、朝から夕方まで園舎で過ごす親の姿が多く見られる。基本的には自由保育が行われているが、一斉保育の時間も設けられており、後者については、どの学年の活動に参加するか、もしくはいずれにも参加しないかは子どもの意思に委ねることとされている。

1986年、大都市において豊かな自然環境のある現在の敷地にトモエが作られたが、当時は無認可の学校として始められた。トモエが私立学校として認可され、園舎を建てるまでには多くの困難があった（詳しくは、木村2001を参照）。署名運動をはじめとする行政への働きかけにより、トモエを私立学校として認可するための制度である「自然体験型特認幼稚園」制度が1987年に作られ、1988年に学校法人「創造の森学園」が設立されている。その過程で、園舎を建てるために設立者の木村仁園長

は自身の生命保険を担保に融資を受け、その資金が投じられて1988年に園舎が完成した（木村2001: 116-130）。

トモエにおける実践の基礎にあるのは、トモエの設立者であり学校法人「創造の森学園」の理事長でもある木村仁園長の人間観・理念である。それは「基礎的人間研究」として、木村園長が独自に長年行ってきた、人間の発達や人間自体に関する問いの探求に基づいて形成されてきたものである。そのような人間観・理念に基づいた、トモエにおける実践を貫く原理として重要なものの一つは、「個々の人間の尊重」であると考えられる。

数点ある木村園長の著作では、精神医学者ポール・トゥルニエの言葉がしばしば引用されている。そのうちの 하나가、

子どもは、大人から敬意をはらわれている度合いに応じて自分の人格を意識し、自分の人間としての尊厳を自覚して自分自身を尊重するようになります。のちに、大人になってからの道徳全体に影響を与えることとなります。<sup>2</sup>

という言葉である。人間の発達にとって最も重要な時期は胎時期・乳幼児期であり、その時期の生活が将来にわたって重大な影響をもたらすものであるとの理解に基づいて、トモエではその時期の子どもに対等な個人として敬意を払いながら接することが特に重視されている。そのため、そこでは子どもと大人の対等な関係性を築くことが目指され、実践されている。

また、トモエでは個々の親に対する働きかけも重視されている。木村園長は、著書の中で、「お母さんが変わらないと、子どもも変わりません。本当の幼児教育を実践しようとしたら、本当に子どもを変えようと思ったら、お母さんが変わるように環境を創らなければなりません。幼児にとってお母さんという存在はものすごく大きな存在です。……私は三十年前にそのことに気がついて、お母さんを変えなきゃいけない、お母さんを育てよう、と決心したのです」（木村2003: 79-80頁）と述べている<sup>3</sup>。このような考えのもとで、親への働きかけも重視した実践が目指され、実践されている。

そして、「個々の人間の尊重」の一つの形として、トモエにおいては「個人の自己表現の尊重」を重視した実践がなされている。木村園長によれば、「[人間にとって] 大切なのは、学校に行く行かないとか、勉強するしないとかっていうことじゃないと思う。その人が感じて、考えて、生きた言葉を語れる [こと] だと思う」<sup>4</sup>。このような人間観・理念のもと、個々の子ども、親の率直な自己表現を促し、親がそうした子どもの自己表現を理解するための環境づくりが目指され、実践されている。

トモエでは、これらをはじめとする、木村園長が形成してきた様々な人間観・理念に基づいた具体的実践が行われているが、第2節から第4節では、その中から本稿の趣旨に特に関連すると思われる実践を取り上げ、その概要をまとめる。

## 2. 札幌トモエ幼稚園の実践—共同体における学び

トモエの実践について特徴的なことの一つが、共同体の一員として親を迎え、そこでの親の学びや成長を支援する形で、家庭生活支援<sup>5</sup>が行われているという点である。様々な人と接し、支え合って子どもと親が育つことのできる環境が必要であるという考えから、共同体における子どもと親の学びや成長のための支援がトモエの中核的実践となっている。

木村園長によれば、トモエに来る親たちは、「一緒に良い環境を作るということを考えている」。親にとってトモエは、

お金払って何かをしてもらうというところではなく、お金を払って、家族が参加して、いい環境をみんなで作っていこうという意味では昔のような、お互いに助け合って補い合っているいい環

境を作ろうとする、あるいは子どもたちを守ろうとか、若い家族を支えるという意味では、長屋的な環境<sup>6</sup>

である。『トモエだより集』（学校法人創造の森学園 札幌トモエ幼稚園編）に掲載されている親からの投書においても、

トモエのことをよく「長屋的な～」と表現されますが、まさにその通りで毎日子どもたちと顔を合わせていると、日々みんなの成長や、キャラクターが感じられてとってもかわいく思うのです。園長の言う通り家族のような気持ちになるからなのではないでしょうか？（学校法人創造の森学園 札幌トモエ幼稚園2017: 5頁）

[子ども]と共に親として通うようになってからは、親だけでは足りないものを、人と自然の中でたくさんもらって成長させられている。（学校法人創造の森学園 札幌トモエ幼稚園2006: 63頁、[]内は引用者）

という記述が見られる。

こうしたトモエの共同体には、親はいつでも参加することができる。既述の通り、基本的に時間や日程に制限を設けず親の参加を受け入れている点は、トモエにおける実践の特徴の一つである。そして、通常の降園時間である2時を過ぎても、保護者が安全を管理するという条件で、日常的に園舎及び園庭が開放されている。したがって、トモエにおいては、園内で様々な人々と接し、様々なことを経験する子どもの姿を目にする機会が多く確保されている。これらの機会は、子どもとの接し方や子どもの発達について悩み、理解を深めていく契機になるものと考えられる。

また、共同体は親同士のつながりの構築にも寄与している。子どもとの接し方や子どもの発達について悩み、理解するための契機が多く用意されているということは、親が様々な葛藤に直面する契機もまた多く用意されているということであるが、トモエの共同体はそのような葛藤を他の親に相談しあえる関係を作る場としても機能していると考えられる。ある親は、次のように書いている。

私がトモエで学んで良かったことのひとつは、「子どもってこういうものなんだ」ということが知れたことです。……トモエの子どもたちは、みな本音で自分を表現しています。……自分も本音で子どもと関わる……すると、子どもも本音を表現することに心地よさを覚えて、長い子育ての中でお互いに心が通じあう関係を作っていくことができる。そのことを園長は伝えてくれています。

それはイコール、自分を見つめることです。人によっては非常につらいこともあります。

しかし、トモエにはその母親の育ちを支えあう大人のコミュニティもあるのです。ですから、自分のつらさを学びに変えることができるのです。<sup>7</sup>

以上のように、トモエでは共同体における親の学びの支援を通じた家庭生活支援がなされている。

### 3. 札幌トモエ幼稚園の実践—学びにおける親の主体性の尊重

こうした親の学びを支援するにあたり、トモエでは親が主体的に考え、決定できるように配慮した働きかけが行われている。ある親の投書には、「自由だからこそ、ひとつひとつの出来事をどう行動するか、自分で選択し、決断できる稀有な場所。私たち親子の成長を、辛抱強く待ってくれるところ」（学校法人創造の森学園 札幌トモエ幼稚園2006: 26頁）という言葉が書かれているが、親からの同旨の投

書が多く見られる。たとえば、

毎日トモエに通う意味合いを、私自身、見出せない日々が続いていた。辛い思いや嫌な思い、悲しい思いも沢山してきた……。しかし、トモエに毎日通って、日々成長する子ども達のパワーを見てきたからこそ、スタッフが子ども達を受けとめる姿を見てきたからこそ、……今回私が一歩前進することができたのだ。……この話を園長にした時、とても喜んでくれた。その時、「あ、私が成長するのを待っていたんだ」と気付いた。……悩み悶々としている私に向かって、園長は「目覚めよ！悟りの時がきたのだ！」とは言わなかった……。私を受けとめ、トモエに存在し続けていただけだ。(学校法人創造の森学園 札幌トモエ幼稚園2006: 60頁)

眠れない夜を過ごしていた中で、ふと気付いたことがありました。それは、私が[息子]との関係を見直すのを園長はずっと待っていてくれていたのでは？ということ。翌朝、真っ先に園長の元に向かい、一言。

「園長、私のこと待っていてたでしょう？」

「待ってたよ。やっと、気付いた？」

多くを語らなくても、園長は分かってくれていました。何度となく、園長から「待つことは愛」と教えられながら、その言葉をよく理解できないままでいたのですが、身を[以て]示してくれていたんだと分かった瞬間でした。(学校法人創造の森学園 札幌トモエ幼稚園2015: 110-111頁、[]内は引用者)

といった投書の記述が見られる。このように親の主体性を重視していることも、トモエの実践における特徴の一つと言える<sup>8</sup>。そして、親に対する支援は、子どもの卒園後も継続されている。園長は卒園後の親子の来園や相談を常時受け付けており、教職員が卒園後の子どもに家庭教師を行いつつ子どもや親の相談相手になるなどの取り組みもなされている。

以上のように、トモエにおいては、親を共同体の主体として積極的に位置付け、その主体的な学びを支援するような実践が行われている。

#### 4. 札幌トモエ幼稚園の実践—共同体が内包する課題へのアプローチ

このような独自性の高い実践には一定の意義が見出される一方で、「共同体における人間の発達」を重視するトモエの実践は、次のような課題を内包している。すなわち、密接な人間関係が形成され、特定の価値観を基盤としている共同体は、外部からの参加(入園)に一定の困難を生じさせ得るとともに、内部にいる人々の参加にも一定の困難を生じさせ得るという課題である。

実際に、特に入園間もない親が、トモエの共同体の特徴である「率直な自己表現で接する人間関係」に対するとまどいや不安感・負担感について述べている投書も、『トモエだより集』に掲載されている。親が参加に対して困難を感じるというこの課題については、トモエでは以下のような共同体づくりが行われており、それがこの課題の対策として機能していると考えられる。

第一に注目されるのが、トモエにおいては、「排除」や「抑圧」の契機を生みにくくする共同体づくりが志向されているという点である。まず、木村園長によれば、可能な限り決まりを作らない方針で園が運営されてきた。たとえば、以前は玄関の靴をそろえる親はほとんどいなかったものの、それについての決まりは作らず、園長が靴を揃えていた。しかし、数年を経て、次第に親たちが自主的に靴を揃えるようになったと言う。また、親の投書によれば、「園の行事や親の自主企画の行事……これらの活動は強制ではなく、『やりたい人がやれる時にやる』というのが基本」(学校法人創造の森学園 札幌トモエ幼稚園2006: 90頁)である。これらの例からは、自生的秩序や自発的活動が生まれるのを待ち、

親に対する義務づけや強制を可能な限り減らすような共同体づくりがなされてきたことが窺える。

そして、親がトモエにいる間、木村園長は常時相談を受けつけている。親が園の実践や園での出来事に疑問や葛藤を感じた際であっても、個人的にその疑問や葛藤を伝える機会が用意されている。

入園申し込み後、体験で入り、大きい子にやられ、「本当にこんなんでも思いやりが育つのだろうか」と、園長先生に怒りをぶつけた事もありましたが、その思いもしっかりと受け止めてくださり [ました]。…… [園長は]「素」の自分を出したからって、はねついたりしない。きちんとそれを受け入れてくれる。それが心地よくて、どんどん出せてしまうのかもしれない。受け入れてもらえる、認めてもらえる、それが嬉しい。(学校法人創造の森学園 札幌トモエ幼稚園2006: 18-19頁、[ ] 内は引用者)

という親の投書も見られるが、このような相談の機会を多く確保することは、共同体において一部の親が疎外されることを防ぐうえで一定の働きをしてきたものと思われる。

さらに、木村園長によれば、共同体において互いを配慮し合える関係が維持できるよう共同体の規模を考慮し、120人という定員が決められている。このことも含め、トモエでは共同体内での「包摂」や「配慮」が生まれやすい環境を確保し、「排除」や「抑圧」を生みにくくすることが志向されている。

第二に注目されるのは、実践の意義を理解し、参加に伴う負担を進んで受け入れようとしている親が見られる点である。たとえば、次のような親からの投書がある。

しかし、それからの2年間はトモエでの時間を親子で楽しむ気持ちが増えた半面、トモエを辞めたいと思う気持ちとの葛藤の繰り返しでした。…… [息子] に向き合おうとすればする程、「こうありたい自分」と「今の自分」との差に苦しみ、逃げ出したいくなりました。他の幼稚園に移れば、時間的な余裕ができるのはもちろんですが、それ以上に自分を見つめる機会がなくなり、精神的にも楽になれます。悩む私を見かねて、夫が転園を勧めたこともありました。ただ、ここでトモエを離れたら、[息子] がもっと大きくなった時に後悔することを自分でも分かっていたので、園長や夫、周りの人たちの力を借りながら、なんとか通い続けてきました。少しずつですが、私の意識が変わると [息子] にも変化が見え始めました。……やっとなんと彼にとっての一番の安全基地になれたのかなとも思いました。(学校法人創造の森学園 札幌トモエ幼稚園2015: 111頁、[ ] 内は引用者)

トモエに来る前は、何となく親や大人の言う事を良く聞いてくれて、その通りに行動してくれる子がいい子、という大人にとって都合のいい、扱いやすい子に引かれていました。トモエに来て驚くことの連続で、やっとなんと私自身が子どもという存在を解っていなかった為の驚愕だったのだと気が付くようになりました。

それが解ってくると、[娘] も普通の子どものらしい子だと安心出来たのです。どーして何故の疑問符が付く行動にも、子どもらしい反抗、攻撃、と納得できます。がしかし、どう対処の方はやっぱり疑問も多いのですが…。……残すところ通園生活あと一年ですが、その間に拾い切れなかったヒントや答えを探しに、卒園後も私だけトモエに向かおうかなとぼんやり思ったりします。(学校法人創造の森学園 札幌トモエ幼稚園2006: 33頁、[ ] 内は引用者)

このように自分自身の学びや変化を共同体参加への動機としている親が存在することからは、親自身の変化や、親と子どもの関わり方の変化が子どもや自分自身にとって望ましいという認識を持つことが、親が負担感を乗り越えるうえで一定の役割を果たしていることが窺える。

トモエでは以上の通り「排除」や「抑圧」の契機が生まれにくくなるような共同体の形成が志向され、共同体参加に伴った負担に見合うと感じ得る学びを行える機会が親に提供されている。これらの取り組みは、学校の内部の人々に対しても、次に入園し得る外部の人々に対しても、共同体をより「開かれた」ものとするに寄与していると考えられる。

#### IV. 札幌トモエ幼稚園における家庭教育支援の公共的な意義と課題

以上の実践がどのような公共的意義と課題を有するかを検討するために、ここでは政治学者の齋藤純一が提示する公共性の3つの意味について簡単に整理したい。齋藤(2000)によれば、公共性という言葉は主に次の3つの内容を指すものとして用いられている。一つが「official」であり、「公共」事業など、国家が関与するという意味で「公的」なものであるということを示している。二つめは「common」であり、「公」益など、社会全体に「共通した」利益があるということを示している。三つめは「open」であり、「公」園の「公」など、社会全体に「開かれている」ということを示している(齋藤2000: viii-ix)。以下では、公共性が持つ上記の3つの意味を踏まえ、トモエにおける実践の公共的な意義と課題について検討する。

トモエにおける実践は、親を学びの主体として包摂した共同体を築き、その中に親が子どもとの関わり方や子どもの発達に関する考えを主体的に変容させ得る契機を確保し、子どもに対しては様々な人々と「率直な自己表現」で密接に関わりあう機会を提供している。そして、親に対する支援は卒園後も行われている。このような家庭教育支援のあり方は、木村園長の人間観・理念とトモエにおけるこれまでの実践を通して形成されてきた独自性の高いものである。このような独自性の高い支援を受ける機会を社会に提供している点で、またそれによって家庭教育支援についての親の選択肢を拡大することに貢献しているという点で、トモエにおける家庭教育支援は「common」としての公共的な意義(公益)があると言える<sup>9</sup>。

しかし、齋藤によれば、「common」としての公共性は「open」としての公共性とはしばしば緊張関係にある。トモエについても、その「common」としての公共的意義の根拠となる独自性の高い実践が、「open」としての公共性をいかに確保するかという点で課題を抱え得るものであると言える。すなわち、実践の独自性を強めれば強めるほど、これから入園する可能性のある子どもや、既に在籍している子ども及びその親のうちの、一部の人々の入園又は参加を実質的に阻害する可能性が強まると言える。トモエにおいては特に、『『共同体』における人間の発達』を重視しているがゆえに、開放性をいかに確保するかという課題への対応が、より困難となる可能性がある。

こうした課題は、単なる経営上の課題にとどまらず、公共性をめぐる課題としても位置づけられるべきである。純粋な私的主体としてでなく、「一条校」としての地位と助成を受けて実践が行われているために、「open」としての公共性を一定程度確保することが社会的に要請されていると考えられるからである。

#### V. おわりに

以上、札幌トモエ幼稚園を事例とし、私立幼稚園による家庭教育支援にいかなる公共的な意義と課題が見出され得るかを明らかにした。より具体的には、独自性の高い家庭教育支援が行われていることに公共的意義を見出せる一方で、一定程度の開放性を確保することが公共的な課題と見なされ得ることを論じた。

「一条校」として一定程度の公的規制を受けながらも、国や地方公共団体に実践内容を一律に規定されることなく学校単位で独自に構想・実施されてきた家庭教育支援が、社会全体で見れば〈多元的な〉家庭教育支援の提供に貢献し得る。トモエ幼稚園はその実践の独自性の高さから、〈多元的な〉家庭教育支援の提供に資する活動をしている園の一つと見なすことができる。この公共的意義は、国



や地方公共団体といった公的主体が家庭教育に対して一定の影響を及ぼそうとする政策が進められ、それが〈一元的な〉「家族像」の実現を奨励する効果を持ち得るなどと指摘される政策動向が見られる今日においては、特に注目すべきものである。その意味で、独自性の高い家庭教育支援に対する公的支援は〈多元的な〉家庭教育支援の提供を促進する一つの方法であり、それを促進することの公共的意義が公的支援を正当化する一つの根拠となり得ると言える。

本研究では、実践の中長期的な観察を実施せず、園長である木村仁氏及び保護者へのインタビュー並びに木村仁氏、札幌トモエ幼稚園によって執筆、編集された書籍に基づき札幌トモエ幼稚園の実践内容を部分的に明らかにしている。また、公共性に関する分析も、齋藤（2000）によって提示された類型的把握に基づき、実践の公共的な意義と課題を整理したに留まっている。これらの点に本稿の限界がある。

NPOや企業、地域住民等、様々な主体の活動を奨励する家庭教育支援施策が積極的に展開されるなか、同じく家庭教育支援を行うことが期待されている幼稚園や保育所における取り組みの意義と課題は、引き続き理論的にも実証的にも明らかにされてゆく必要がある。

### 【付記】

本稿は、科研費基盤研究B「生涯学習行政の推進における公と私に関する理論的実証的研究」(研究代表者：背戸博史)の助成を受けて得られた研究成果の一部である。また、本稿は、2017年9月1日及び同年10月25日に行った、札幌トモエ幼稚園への訪問調査に基づくものである。長時間にわたるインタビューにお答えくださった木村仁園長、そして教職員と保護者の方々に、記して感謝申し上げます。

### 注

- <sup>1</sup> 文部科学省（2018）1頁で示されている平成30年度学校基本調査の結果によれば、幼稚園全体に占める私立幼稚園の割合は約63.9%である。また、厚生労働省（n.d.）4頁で示されている平成29年度社会福祉施設等調査の結果によれば、保育所全体に占める私営保育所の割合は約67.9%である。
- <sup>2</sup> この言葉は木村（n.d.）第二章において引用されている。
- <sup>3</sup> 同書が母親に焦点を当てて述べた著書であるためここでは母親に限定された記述となっているが、トモエにおける実践は母親のみに焦点を当てていない。
- <sup>4</sup> 木村仁園長へのインタビュー（2017年10月25日、トモエ幼稚園にて）。[ ]内は引用者。
- <sup>5</sup> 木村園長は、「教育」が学力中心の営みを連想させる等の理由から「教育」という言葉を自身の実践を表す際に用いることをやめ、現在のトモエでは、「教育」の基礎にある人間の生活に対する支援を行うという理念のもとで、実践が行われている。その意味で、木村園長によれば、トモエで行っていることは「家庭教育支援」ではなく「家庭生活支援」である。そこで、トモエの実践をまとめた本章第二節から第四節においては「家庭教育支援」を「家庭生活支援」と表記し、それ以外の部分では便宜上「家庭教育支援」と表記する。
- <sup>6</sup> 木村仁園長へのインタビュー（2017年10月25日、トモエ幼稚園にて）。
- <sup>7</sup> トモエに通う園児の保護者から2017年11月5日に筆者が受け取った電子メールより。
- <sup>8</sup> 投書集からは、このような主体的な学びを通し、親が自身の変化、成長を一定程度実感していることが窺える。たとえば、トモエでの出来事に衝撃を受けたり葛藤を抱えたりしながらも、自分自身で悩み考えながら、時間を掛けて「気づき」が得られた、子どもとの関係性をより前向きなものに変えられたという趣旨の投書がしばしば見られる（たとえば、学校法人創造の森学園 札幌トモエ幼稚園2006: 24-26頁、59-60頁など）。
- <sup>9</sup> この部分については、同様の論理で私立学校の公共性を論じている市川（2002）を参照した。「私学の自主性は学校教育全体の多様性を生み、それが人々の選択の可能性を増大させるなど、独自性

の発揮が広い意味での公共性の推進となる場合が十分ありうる」(市川2002: 55頁)。

#### 参考文献・資料

- 市川昭午 (2002) 「私学への負担金(私学助成)についての理論的考察」 東京私学教育研究所『所報』(67)、45 - 58頁
- 木村仁 (2001) 『創造の森の仲間たち』 樹心社
- 木村仁 (2003) 『お母さんが輝く子育てのすすめ—人間のすばらしさを発見する教育』 樹心社
- 木村仁 (n.d.) 『人間の豊かな感性を養い、人間の尊厳を確立する基礎的人権教育の創造 (2005・06年度文部科学省人権教育開発事業報告書)』
- 齋藤純一 (2000) 『公共性』 岩波書店
- 学校法人創造の森学園・札幌トモエ幼稚園編 (2006) 『トモエの魔法 トモエだより集・3 1999～2005』 学校法人創造の森学園・札幌トモエ幼稚園
- 学校法人創造の森学園・札幌トモエ幼稚園編 (2015) 『なんでトモエ? トモエだより集・4 2006～2009』 学校法人創造の森学園・札幌トモエ幼稚園
- 学校法人創造の森学園・札幌トモエ幼稚園編 (2017) 『こころを使って生きる トモエだより集・5 2010～2014』 学校法人創造の森学園・札幌トモエ幼稚園
- 厚生労働省 (n.d.) 「結果の概要【基本票編】 1 施設の状況」、(<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/fukushi/17/dl/tyosa.pdf>、2019年1月7日閲覧)
- 文部科学省 (2009) 「幼稚園における子育て支援活動及び預かり保育の事例集」 (<https://www.pref.oita.jp/uploaded/attachment/2007743.pdf>、2019年1月7日閲覧)
- 文部科学省 (2018) 「II調査結果の概要 [学校調査、学校通信教育調査 (高等学校)]」、([http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/other/\\_icsFiles/afieldfile/2018/12/25/1407449\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2018/12/25/1407449_2.pdf)、2019年1月7日閲覧)
- 文部科学省 (n.d.) 「平成28年度幼児教育実態調査」 ([http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/01/17/1278591\\_05.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/01/17/1278591_05.pdf)、2019年1月7日閲覧)